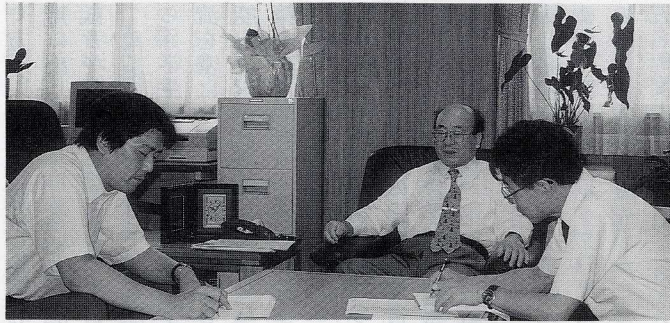


夏休みに入ったある日、東千田の学長室を訪ねて、財団設立や教養的教育をめぐる状況などについて質問した。聞き手は岡本、越智の両広報委員。



広報委員 七月三十一日に「財団法人広島大学後援会」設立のための発起人会が開かれたと聞きました。懸案の財団ですが、学長としてどのような感慨をお持ちでしょうか。学長 Ⅱ ようやく発起人会までこぎつけた。これは佐竹寛氏を代表とする四十二名による構成だが、今後この組織を核として財団を設立申請するこ

とになる。財団設立は、かねてから本学の構成員みんなの念願であっただけに、実現できることは私の大きな喜びだ。これで広大の教育・研究活動を支援するための実質的な母体ができあがるわけだ。

これを使得って、研究助成や国際交流支援、さらには講演会、シンポジウム、セミナー開催に対する補助が可能にな

した学外の熱い声に応えていかなければならない使命があると思う。そのためにも、いつも言っていることだが、学内の構成員の意識改革がぜひとも必要だ。広島大学は学部の集合ではなく、一つの大学だという意識だ。これなくして本学の発展はない。一致団結してよりよい大学を目指すという意識がなければ、新し

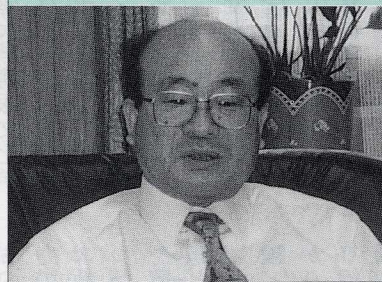
ある。私はこの広島大学後援会と同窓会連合が両輪となって、やがて迎える五十周年事業が盛大に開催される日を楽しみにしている。前者も後者も、大学改革の貴重な成果だ。これらとともに、現在進行中の教育改革が実を結べば、広島大学は、日本の大学になるはずだ。これがずっと私が夢

学長インタビュー

No.18

日時 平成八年八月二日(金)
場所 学長室

夢は、みんなのための財団設立と日本一の教養教育



るし、とりわけこれまで難しかった職員の海外研修などへも援助できることになる。学生、教員、職員「みんなの財団」が早く実現できるような頑張りたい。

この発起人会で感銘を受けたことがある。大学は日本の将来を担う優秀な人材をつくる場所だから、これを支援することは「企業として」も「一市民として」も「社会的な義務」だと、佐竹氏が語られたことだ。本学には、こう

い大学の姿が実現できるはずがない。これは、本学に集うわれわれ自身に関わるだけではなく、将来の本学の構成員すべてに関わっている。新しい大学を創らなければ、学生の進路すら開かれない時代が間もなくやってこよう。何もしないで大学はやっていけないなどと思ってはならない。新しい大学が実りあるものになるためには、いま大学人が一つの意識のもとで協力しあう必要が

見ている広大の姿なのだ。広報委員 Ⅱ 平成九年度から開設される新教養的教育の検討が大詰めに来ています。これから行われる教養的教育の目標、特色などをお聞かせください。学長 Ⅱ 今「ほっておいでも学生が売れる」時代ではなくなっている。私は学生の「出口」について真剣に考えている。日本だけではなく、世界にその頭脳で出ていけるような人材を育てる教育を考えて